
落ちる月

熊曾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちる月

【Nコード】

N6406P

【作者名】

熊曾

【あらすじ】

月が落ちる。世界が終わる数分前。

ビルの屋上から夜空を見上げる。

まぎれもなく、月は近づいてきている。

手すりから身を乗り出し、街を見下ろす。

誰かが叫ぶのが聞こえた。

「何なんだよ、まったく」

俺はつぶやく。

予定のない日曜日。ただ今日一日、何も考えずに過ごせばよかった。ここから月を眺め、後はアパートに帰るだけだった。明日からはまた、満員電車で通学するはずだった。

だが確実に、世界は終わろうとしている。

悲しい事はない。どうだってよかった。昨日だって、一昨日だって、楽しいことなどなかった。

だが、いざ死ぬとなると、何か勿体ないような気持ちになった。

「まあいいさ。どうせ何もできない」

この特等席から、世界の終わりを見物しよう。そう決めて、自販機のコーンスープを一口、口に含む。

——しかし、月は上から落ちてくるわけだから、一番最初に死ぬのは俺じゃないか——

そんなくだらないことを考えながら。

背後で、扉の開く音が聞こえた。誰かが屋上に昇ってきたのだ。

中年の男だった。疲れた顔をしている。男はネクタイをゆるめながら俺の横に並んだ。

「こんばんは」

月を眺めつつ、男は言う。

「こんばんは」

前を向いたまま返事する。

しばらく、男はじつと月を睨んでいた。

月はとうとう、手でかざしたリングほどの大きさになった。

男が顔をこちらに向けた。

「君も、終わりを見物に来たのかい？」

「ええ、そんなところです」

「本当に、これで終わりなのだろうか」

「何か心残りか？」

「最期に、子供の顔を見ておきたかったが……」

「家はどちらで？ 今から帰れば、間に合うかもしれないよ」

「いや、先日、逃げられてしまつてね。妻にも、子供にも。この歳で寂しい一人暮らしだ。妻の実家まで行くのでは、とても間に合わない」

なるほど、どうりでやつれている。

「私がいけなかったんだ。つまらないことで怒鳴りつけて、手を上げて。妻に感謝もせず……いつも亭主面して……。妻はいつだって一生懸命で、それに私よりずっと賢かった……。今思えば、私には不釣り合いな、立派な人間だったんだ。それを……」

それは伝えようのない想いだつた。

男は飛び上がり、フェンスを越える。月より先に落ちてゆく。

「なにをわざわざ……。おとなしく待っていればよかったのに」

月はいまや、風船のように膨らみ続けていた。

数年前、親父が死んだ。

入院から一年以上経っていたし、そうなることは分かっていた。

それに、親父のことは好きではなかった。

だから俺は泣くこともなかった。

母はしばらくふさぎ込んでいたが、やがて以前の様に元気を取り戻した。

一つ違ったのは、一羽の鳥の世話に夢中になっていたことだ。

親父が死ぬ少し前から家にいた、白い羽の鳥だった。

母は、まるで親父にそうする時の様に、その鳥に話しかけていた。ただ、母が仕事で遅いときは、俺がその鳥の世話をするルールだった。

ある寒い冬の夜、俺は自室のベッドに寝転がり、漫画を読んでいた。母は帰っていなかったが、俺は鳥のことなど忘れていた。

その夜、鳥は死んだ。

母は居間で泣いていた。俺の姿を見つけると、声にならない声で怒鳴った。

——たかが鳥で、どうしてそこまで。

この頃から俺は、母を無視するようになった。

両手を広げても、もう月の両端には届かなかった。

目下の街から、いくつもの泣き声が聞こえてきた。

きつと死ぬのが怖いのだ。それは幸せなことなのだろうか。

その時だった。泣き声の中の一つに、母のものが聞こえた。

気のせいだったのかもしれない。しかし、俺ははつきりと思い出していた。親父が死んだときの母の姿を。

絶望の表情。壊れかけた心。

だが、母はそこから立ち上がり、職を見つけ、家事もこなして、俺の将来のことまで考えて……。

一足先に落ちて行つた、先程の男の言葉を思い出す。

俺だつてそうだ。

親父にも、母さんにも、感謝すらしていなかった。当たり前のような顔をして生きてきた。思い返せば二人とも、俺のことを、本当に大切にしてくれた。

あの鳥だつて、親父が買ってくれたものだった。残された俺たちが寂しい思いをしないようにと、あれは不器用な気遣いだったのか。「俺は馬鹿か」

本当に、大馬鹿者だ。

無性に飛び降りたくなる。さっきの男の気持ちがよくわかる。

だが俺は落ちない。あの月だって、落とさせない。

俺の背中に、大きな白い羽が生えた。

強く羽ばたき、ぐんぐんと空に昇ってゆく。

街はあつという間に小さくなる。月はみるみる近くなる。

まっすぐに、自分の体を月面につきたてる。

激しい衝撃が体を駆け巡り、骨が砕ける。

それでも懸命に羽を動かす。

月は空へと昇りだす。

「終わりだな、こりゃ」

——母さんより先に死ぬのか、俺。親孝行のつもりが、情けない。

白い羽が一枚落ちてきた。開いた窓から、アパートの一室へと滑り込む。

母はそれを拾い上げ、泣きはらした目で見つめた。

元通りになった月の光の中、いつまでも見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6406p/>

落ちる月

2011年1月3日23時55分発行